

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

The Newsletter **CNEAS**

第17号

● 目次 ●

3月に2つのシンポジウムが開催	1
萬華鏡：中央民族大学とその蒙古語文学系について	2
公開講演会「東北アジアの新情勢と地域協力の展望：日本・北朝鮮・韓国」	3
Area Report [SIGNAL]：「中国」・「ロシア」・「モンゴル」	4
シンポジウム「東北アジアにおける民族と政治」報告	5
共同研究「白頭山10世紀巨大噴火とその歴史効果」第3回公開シンポジウム	5
日本館便り	6
最近の共同研究会から	6
最近のセンター出版物より	7
センター動向	7
活動風景「強酸性湖沼の生態学的研究紹介」	8

3月に2つのシンポジウムが開催

2003年3月5日（土）14時から三井アーバンホテル仙台で「白頭山10世紀巨大噴火とその歴史効果」第3回公開シンポジウムが開かれました。また、3月5日（土）と6日（日）の二日間、東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟4階会議室で合同シンポジウム「東北アジアにおける民族と政治」が開かれました。それぞれの講演内容に関しては5ページに掲載しています。

●白頭山10世紀巨大噴火とその歴史効果●



会場風景



町田洋・東京都立大学名誉教授による招待講演

●東北アジアにおける民族と政治●



基調講演をする江夏教授



シンポジウム会場



中央民族大学とその蒙古語言文学系について

客員教授 王 滿特嘎 (岡 洋樹 訳)

《大学の概要》中央民族大学は、中国の少数民族教育を行う総合大学である。1950年6月、中国政府は北京に中央民族学院を設立することを決定した。同年11月、政務院第六十回政務会議において、中央民族事務委員会が提出した「培養少数民族幹部試行方案」が批准され、中央民族学院と、中南・西南・西北民族学院分院の設置が決定された。同時に批准された「籌辦中央民族学院試行方案」には、中央民族学院の任務として、1：少数民族の高級・中級幹部の養成、2：中国の少数民族問題・民族言語・文字、歴史・文化・社会経済の研究、3：編集・翻訳事業の組織と指導の三点が規定された。これに基づき、1951年6月11日、中央民族学院が開学したのである。翌年には清華大学社会学系、燕京大学社会学系・北京大学東語系の教官が中央民族学院に編入されるとともに、最初の学部生が入学した。

同大は、設立当初は、北京の国子監跡に置かれたが、まもなく北京大学・中国人民大学などの主要大学が林立する北京市西北部海淀区の現キャンパスに移っている。1979年には修士課程が、80年代末には博士課程が設置された。

現在同大には、15の学院が置かれ、その下に1つもしくは複数の系（学部）に相当が置かれている。すなわち中国少数民族語言文学学院（維哈柯語言文学系、朝鮮語言文学系、蒙古語言文学系、少数民族語言文学系）、民族学与社会学学院（民族学系、民族理論与民族政策教科部）、管理学院、经济学院（經濟与管理系、少数民族經濟研究所）、法学院（法律系）、理工学院（信息与計算科学系、物理与電子工程系、計算機科学与技术系）、音楽学院、舞蹈学院、美术学院、藏学研究院、成人教育学院、國際語言文化学院、生命与环境科学学院、外国語学院、文学与新聞傳播学院であり、学院を構成しない独立系として哲学与宗教学系、歴史系、教育系、体育系がある。この他に、芸術研究所、馬列教科部、預科部、現代教育技術部、中国少数民族研究中心が設置されている。教職員数は1800人余（内教授79人、副教授295人）で、学生は8000人余（内大学院生350人余、留学生200人余）が在籍している。

また研究組織として、同大には多くの研究所が設置されている。これらの研究所・研究センターは、その多くが各系に設置され、系所属教官が兼務するものである。すなわち民族学人類学研究所、語言文化研究所、少数民族經濟研究所、少数民族文学芸術研究所、藏学研究所、民族理論与民族政策研究所、民族教育研究所、朝鮮学研究所、民族史研究所、民族法学研究所、滿学研究所、中国岩画研究中心、

社会發展研究所、宗教研究所、少数民族古籍研究所、韓國文化研究所、数学教育研究所、応用数学研究所、応用物理研究所、民族地区環境資源保護研究所、光電研究所、中瑞計算機应用技术研究所、中亜学研究所、康賽電腦語言学研究中心、蒙古学研究所、壮侗学研究所、計算語言学研究所、多元文化研究所、穆斯林文化研究所、中国少数民族婦女研究中心、哈尼学研究所、商圈期貨研究所、図象芸術研究所、多元文化与外語教学研究、成人教育研究所、民族戲劇研究中心、語言文学研究所、民俗文化交流中心、彝学研究所、元代文学研究所、苗学研究所、維吾爾学研究所等である。

《蒙古語言文学系》1951年6月の中央民族学院設置の翌年には民族語文系に蒙古語言文学専攻が設置されている。文化大革命の時期には1966年から5年にわたって学生募集を停止するなど、苦難を経験したが、文革が終了した1977年からは四年制の学部教育が復活し、ついで修士課程が設置されている。

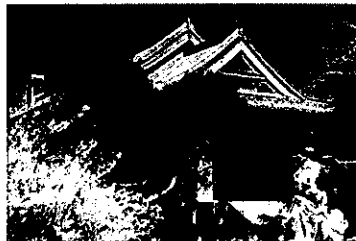
1986年に民族語文系が民語一系・二系・三系に再編されると、蒙古語言文学専攻は朝鮮語・チベット語専攻とともに民語一系に属した。1993年の民族学院の大学への昇格後、1994年に中国少数民族語言文学学院が創設され、その下に少数民族語言文学系、維哈柯語言文学系、朝鮮語言文学系、蒙古語言文学系が設置された。1979年に修士課程、1996年に博士課程が設置された。

現在蒙古語言文学系は、教授7名、副教授2名、講師7名併せて16名の教官と職員2名

がいる。学生数は112名で、内学部生103名、修士課程学生12名、博士課程学生7名である。現在まで同系の卒業生は913人に及ぶ。

教員として、賀希格陶克陶（教授：モンゴル文学史・歴史文献学）、烏力吉（教授：モンゴル・チベット古典文学）、王滿特嘎（系主任、副学院長、教授：文学理論）、徳力格爾瑪（教授：モンゴル言語学）、伍月（教授：近代文学）、薩仁格日勒（教授：文学・民俗学）、那木吉拉（教授：歴史学・文学）、金剛（副教授：言語学）、胡格吉夫（副教授：口承文艺研究）、拉斯格瑪（講師：外国文学）、陶克（講師：古代文学）、吉特格勒因（講師：言語学）、包滿亮（講師：言語学）、葉爾達（講師：文学）、南快（講師：新聞学）、王色音巴雅爾（講師：言語学）が勤務している。

国外ではモンゴル国の国立大学モンゴル学学院と交流協定を締結しており、教官の相互派遣や短期セミナーを共同開催している。また日本では東京外国語大学、早稲田大学、大阪外国語大学と交流があり、客員教官の招聘が行われている。



中央民族大学キャンパス



中央民族大学講堂

公開講演会

東北アジアの新情勢と地域協力の展望：日本・北朝鮮・韓国

去る平成15年2月26日（水）、センター4階会議室においてセンター客員教授和田春樹先生が表記のテーマで講演された。当日の先生による講演の内容について簡単にまとめることにする。

和田氏の論点は、第一に2002年9月17日に調印された日朝平壤宣言をめぐる諸問題、第二にちょうど今回の講演の前日にソウルで行なわれた韓国新大統領盧武鉉氏による就任演説に見られる「東北アジア構想」に関する問題、第三に第二点における指摘とも深く関係するが「東北アジアか北東アジアか」という呼称の問題、以上の三点からなっていた。

第一点の平壤宣言について和田氏は、国交正常化、日本の植民地支配への反省、経済協力、拉致、不審船などの安全保障問題の他に、特に四番目の合意、すなわち朝鮮半島の核問題の包括的な解決のため、関連するすべての国際的合意を遵守することに合意するという文言に注目した。この国際的合意には、和田氏のみるところ米朝枠組み合意、すなわちプルトニウム再処理工場を稼働しないことを（1992年に結ばれた南北非核化宣言をも）合意し、したが



講演する和田春樹客員教授

ってその遵守は朝鮮半島における非核化合意を遵守することを意図しているとし、日本側は警戒した米国の示唆にも関わらずこの条項を入れることを自主的に決め、日本側からの提案であるこの条項を北朝鮮側がのんだものとしてきわめて重要であると主張する。平壤宣言までの流れに関しては、金大中前韓国大統領の平壤訪問で盛り上がりを見せた2000年の朝鮮半島における緊張緩和に端を発し、対米交渉の不調もあって同年末北朝鮮側から日本に対して密かに首脳同士の会談（補償はいいので経済協力を、拉致問題は首脳会談で決着を）が打診されたものの、当時の森首相は日露交渉に手一杯で北朝鮮にまで手が回らず2001年4月に退陣した。その間にも、2001年元旦の北朝鮮新年三紙共同社説に、「現代的技術によって北朝鮮経済を改建し（ペレストロイカ）」、「新思考」でのぞむということを出し出していたことに注目していたが、いったいどこから資金を調達つもりなのか全く裏が見えなかった。表に出てこなかった上述の北朝鮮からのアプローチを考慮すると、日本を交渉相手に経済改革を推進しようとしていた意図があとになって読み取れるという。その後9・11事件（ニューヨークにおける同時多発テロ）が起きると、翌2002年1月に米国ブッシュ大統領は悪の枢軸にイラン、イラクとともに北朝鮮も含めて圧力をかけた。これより前2001年末から北朝鮮は、新任の外務省アジア大洋州局長田中均氏に再度アプローチしはじめ、2002年春には有本恵子さんの拉致に加担したと八尾めぐみ氏が法廷で発言したため北朝鮮への経済制裁問題が日本国内で浮上したが、それでも田中氏を中心に秘密交渉は続行され、9月の小泉首相訪朝が実現することに

なった。以上が平壤宣言に至る経緯である。しかし周知の通り、拉致問題で日本国民の間に憤激が高まり、対北朝鮮外交の主導権も田中氏から安部晋三官房副長官の手に渡り、日朝国交交渉の中断、KEDO（朝鮮半島エネルギー開発機構）による北朝鮮への重油提供の中止、北朝鮮によるNPT（核兵器不拡散条約）からの脱退と寧辺の核施設の再稼働へと事態は進展していくことになった。本来、日朝交渉がうまくいってれば、米朝交渉もうまくいく可能性があるとする。北朝鮮の新聞は2003年の年頭の辞で日朝交渉についてなんら言及せず、ほぼ米朝交渉に終始していることをみても、上述した流れを考慮すると対日交渉にまだ望みを抱いている可能性がある、との指摘であった。米軍による対イラク戦争もほぼ終結し（4月16日現在）、次はシリアか北朝鮮かといった議論までなされているが、日本にとっても死活の重要性をもつこの地域の安全保障問題が、最低限の犠牲のもとに解決されることが望まれよう。そのためにも感情論に走るのではなく冷静沈着な分析が必要であろう。

第二点の盧武鉉演説に関しては、韓国国民に「東北アジア時代」が到来したと宣言したことに和田氏は特に注目した。世界の辺境にとどまっていた東北アジア地域が世界経済の中でも大きな比重を占めつつあるが、韓半島は日中両国を連結するという地政学的に重要な位置にあり、韓国は東北アジア地域においても物流・金融の中心的役割を果たすことができる。この経済的な「繁栄の共同体」から、欧州連合同様に「平和の共同体」、平和と共生の秩序が構築されるのが夢であると述べ、その東北アジア時代到来のために全力を尽くすと宣言した韓国新大統領の発言は、予想をはるかに越えたものであったと和田氏は高く評価した。

第三点の呼称問題に関して、「東北アジア」と韓国新大統領が連発したにも関わらず、一部新聞が英語の Northeast の



2月26日の公開講演会場

訳語「北東」アジアを付記しているように、本来漢字圏で方角を表記する際、東西が先に来るべきであるにも関わらず、日本では「北東アジア」（和田氏によれば平壤宣言について北朝鮮では東北亜、日本の外交文書でおそらく始めて「北東アジア」という言葉が使用された）といった誤った言い方がなされ（例えば外務省の「南東アジア課」が「東南アジア」政策を実行）、しかも日本海側の自治体が環日本海地域に対する自治体外交を、中国、韓国等の批判に答える形で「北東アジア地域」と称して推進しているため、この名称が流布しつつある現状を和田氏は憂慮され、「東北アジア」への名称の統一を主張された。

和田先生の講演後、拉致と強制連行、慰安婦問題などについて活発な質疑応答が行なわれた。

（寺山恭輔）

AREA REPORT

SIGNAL

中国から 急速に普及する PHS

90年代以降の中国における携帯電話の普及はめざましいが、最近はこれに新たな動きが生じている。「小靈通（シャオリントン）」と呼ばれる中国版PHSの普及である。そもそも中国で携帯電話が急速に普及した背景には、中国当局による旧国営電話会社の固定電話分野と移動電話分野への事業分割およびそれによる競争の促進、携帯電話の回線開通手続き上の簡素さ、市場経済下における個人通信手段の需要の増大などが挙げられる。ついこの間まで連絡手段が職場などへの呼び出し電話であったことを思うと隔世の感がある。業績の伸び悩みに業を煮やした固定電話企業が打ち出したのが、技術的には固定電話の延長とされ移動体通信業務の認可が不要な小靈通であった。中国の携帯電話は送信者と受信者双方に課金される仕組みであるのに対し

て、小靈通は送信者への課金のみである上に通信費が安い。しかし中国当局はこれまで技術的問題などを理由に大都市での利用を禁止・制約してきた。それにも関わらず小靈通はここ数年で地方都市から徐々に利用者を拡大させ、ついに今年3月に開かれた全国政治協商会議において中国当局が大都市での小靈通の解禁を黙認するに至った。北京でもこれを受けて郊外の新興住宅地からサービスが開始され、都心部で利用可能となるのも時間の問題である。一方の携帯電話も料金の改定や新サービスなどの対抗策を打ち出している。中国の通信業界はこうした激しい競争の中、次世代携帯通信の動向をもにらみつつ、新たな段階へと進もうとしている。

(上野稔弘)

ロシアから t.A.T.u.が英国ヒットチャート1位に

ロシアのクラシック音楽はチャイコフスキーを始め世界に数多く紹介され、多くの国々で親しまれていますが、ロシアの大衆向け歌謡曲が世界で好評を博することは極めて稀です。しかし、1990年代に入りロシアの歌手の中に世界に打って出ようとする人々が現れました。中でも最も成功を収めたのが、女性二人組みのグループ「タトゥー（t.A.T.u.）」です。今年の2月上旬にタトゥーの曲「All the things she said」が英国ヒットチャート1位に輝きました。女性同士の恋愛を歌うというセンセーショナル性と、ロシア独自のメロディーとが海外のリスナーを魅了したのだと思います。

タトゥーのアルバムは3月5日に日本で初めて発売されましたが、CDの販売は好調であり、現在50万枚のベスト

セラーとなっています。今年日本のメディアで流れる外国の曲のなかで、このグループの歌がNo.1に輝くことは確実です。アルバムの売れ行きはまだ好調なので、場合によっては100万枚の売り上げにつながるかもしれません。このグループの人気を通じて、日本の若者の中でロシアに対する関心が高まれば望ましいと考えています。



t.A.T.u.のアルバムの表紙より

(塩谷昌史)

モンゴルから 「内モンゴル」と「外モンゴル」

モンゴルが大きく内外に分けられることはよく知られている。現在「内モンゴル」は中国の内モンゴル自治区を、「外モンゴル」はモンゴル国を指すことになっている。モンゴル語では「内」は南を意味するウブル、「外」は北を意味するアルが用いられるので、両者を「南モンゴル」「北モンゴル」と呼ぶことも多い。内外モンゴルの呼称は17世紀から20世紀の初めまでモンゴルを統治した清朝の時代に遡るが、当時の「内」と「外」は現代のそれとは異なり、内モンゴルは現在の自治区よりかなり狭く、外モンゴルはモンゴル国全域と現内モンゴル自治区の西部と現新疆ウイグル自治区・青海省のモンゴル人を含んでいた。内外モンゴルの違いは何なのかという疑問に即答するのはた

いへん難しい。つきつめると、清朝でモンゴル事務を管轄していた理藩院という役所の異なった部局が管轄したことに関わる。それが近代に入って二つの国家に分けられたことで、別々の地域区分となった。清朝が滅亡するとモンゴルは独立を目指すのが、「モンゴル」に含まれるべき領域・住民をどのように定義するかが問題であった。1915年、モンゴルの独立問題を協議したロシア・中国・モンゴルによるキャプタ三者会議でモンゴル側代表団は、モンゴルの領域は「清国理藩院が定めた蒙古律例に示された境域を基本」としている。つまり清朝の役所の管轄権限が、国の領域の理解にも影響していたことになるのである。

(岡 洋樹)

シンポジウム「東北アジアにおける民族と政治」報告

2003年3月15～16日において、シンポジウム「東北アジアにおける民族と政治」が開催された。このシンポジウムは、東北アジアセンター共同研究「東北アジア世界の形成と地域構造」の一環として行われたものである。同共同研究は、東北アジア地域概念に対する考察をふまえながら、当該地域に関わる諸々の学際的研究課題を発見するとともに、東北アジア地域研究に従事する研究者ネットワークの構築を目的としている。ここでいう「学際的研究課題の発見」とは、各専門分野毎の問題関心を維持しつつも、共有しうる議論の枠組みを設定するとともに、そこで求められる概念の整理あるいは方法論の探求といった作業が含まれている。本シンポジウムでは、そうした目的を遂行するため、国内のさまざまな研究機関に属する研究者が招聘され、さらに全国各地から50余名が参加した。2日間合計して13時間という長時間にわたって、活発な議論が繰り広げられた。

モンゴル・シベリア・中国東北部地域を中心に、〈学術と政治〉及び〈民族と国家〉に関わる諸問題を、歴史学・人類学の視点から検討することを趣旨としたこのシンポジウムは基調講演と三つのセッションから構成された。基調講演では、経済史の視点から、近代東北アジア地域における経済統合の問題が扱われ、第1セッション「東北アジア研究における政治と学術（科学）」では、戦前の満州及びモンゴルにおける文献及びフィールド調査を中心的な題材とし、地域研究の近らむ政治性が批判的に討論された。この二つが東北アジア地域の近代史をめぐるとともに、そこで求められる概念の整理あるいは方法論の探求といった作業が含まれている。本シンポジウムでは、そうした目的を遂行するため、国内のさまざまな研究機関に属する研究者が招聘され、さらに全国各地から50余名が参加した。2日間合計して13時間という長時間にわたって、活発な議論が繰り広げられた。

第2セッション「北アジア牧畜民における〈遊動/遊牧〉概念と近代国家」の趣旨は、北アジア牧畜民社会における移動及び遊動（遊牧）のあり方を、人類学的視点から理論的に整理・検討し、さらに近代国家が彼らの移動/遊動をどのように規制・管理しようとしてきたかについての考察を行うことだった。続く、第3セッション「東北アジア史における国家と民族」では、東北アジアに歴史上興亡した国家と民族について、モンゴル史・満州史の立場から検討された。とりわけモンゴル帝国・清朝という「帝国」の支配＝統治構造の諸側面を明らかにすることで、その歴史的意義と現代への影響が議論された。

最後の総合討論では、上記のセッションを受けてさまざまな課題が提示され、検討された。そこで得られた共通の議論の新たな枠組みはa) 地域研究における調査者と被調査者の関係、b) 地域研究における個人（person）の役割の評価の方法である。前者は、単に文系だけでなく、現地調査を行うあらゆる専門分野に関わる問題であり、これを

単に倫理の問題として研究から切り離すのではなく、被調査者と調査者がともに共有できる研究領域をいかに確立できるかという地域研究の根幹に関わる問題である。後者は、従来の地域研究は、政治経済・歴史・文化いずれにしても、いわゆる制度的・社会規範的な領域を解明することで「地域」が語られてきたことに対し、むしろそうした集合性を支え、あるいは抗う個人の役割を積極的にふまえた研究手法の確立が求められるという視座であった。今後、このような枠組みをふまえた各自の研究が進んでいくことが期待される。

プログラム（敬称略） 総合司会：栗林均（東北大学CNEAS）
3月15日（土）

- 基調講演「近代東北アジア地域における経済統合の問題
——東亜勸業株式会社の事例から」
江夏由樹（一橋大学・東北大学CNEAS客員教授）
- 第1セッション 東北アジア研究における政治と学術（科学）
 - 1) 「興安省と、興安局の実態調査をめぐって」吉田順一（早稲田大学）
 - 2) 「ソビエト連邦の民族政策と東アジアへの影響
——台湾ツォウ族高一生の民族自治区構想」
中生勝美（大阪市立大学）

討論者：坂野徹（玉川大学）座長：上野稔弘（東北大学CNEAS）
3月16日（日）

- 第2セッション 北アジア牧畜民における
〈遊動/遊牧〉概念と近代国家
 - 1) 「モンゴル国における移動・牧畜・近代国家
——オンゴン・ソムの事例」
尾崎孝宏（鹿児島大学）
 - 2) 「ロシアの異民族（先住民）統治における
〈非定住民〉——概要と西シベリアの事例」吉田 陸（千葉大学）
討論者：渡邊日日（東京大学）座長：高倉浩樹（東北大学CNEAS）
 - 第3セッション 東北アジア史における国家と民族
 - 1) 「金代のキタイ系武將とその軍団——蕭恭の事跡を中心に」
松井 太（弘前大学）
 - 2) 「満洲族政権としての清朝」
細谷良夫（東北学院大学）
- 討論者：張 永江（中国人民大学清史研究所）
北川誠一（東北大学）
座長：岡 洋樹（東北大学CNEAS）
- 総合討論 座長：瀬川昌久（東北大学CNEAS）
(高倉浩樹)

共同研究「白頭山10世紀巨大噴火とその歴史効果」第3回公開シンポジウム

2003年3月15日（土）13:00より、表記シンポジウムが三井アーバンホテル仙台・月宴の間で開催された。講演は以下のように2部構成で行われ、第2部終了後、総合討論が行われた。

第1部 招待講演

- ・町田 洋（東京都立大学名誉教授）
「白頭山とその10世紀の巨大噴火」
- ・鶴園 裕（金沢大学経済学部）
「高麗・朝鮮からみた、渤海・白頭山への関心」

第2部 研究報告

- ・奥野 充（福岡大学理学部）
「樹木年輪の炭素14ウイグルマッチングによる
B-Tmの年代決定（途中経過報告）」
- ・宮本 毅（東北アジア研究センター）
「白頭山10世紀巨大噴火の噴火推移
——2回のイグニンプライト噴火の発生——」
- ・中川光弘（北海道大学大学院理学研究科）
「白頭山9世紀噴火の発見とその意義」
- ・成澤 勝（東北アジア研究センター）
「渤海末期遼初期3大河流域の社会及び文化の検証
——臨地研究・文献調査から——」

本共同研究は、過去2000年間で世界最大級とされる白頭山（中国名：長白山）の10世紀噴火がもたらした人類史への影響について、文理融合研究により明らかにしようとしている。第1部では文系・理系各一名の白頭山研究者を迎え、それぞれの分野における白頭山研究の現状について紹介された。特に町田洋・東京都立大学名誉教授は自然科学分野において世界的にも白頭山研究の第一人者であり、火山地

質・自然災害・中国史といった多方面にわたっての白頭山研究についての講演がなされた。町田先生は過去に白頭山の北朝鮮領側での現地調査を経験されており、現在の国際情勢からはなかなか得難い貴重な情報が提示され、大変興味深い講演であった。

第2部では共同研究メンバーによって、主に昨年度の現地調査に基づく研究報告がなされた。理系研究者からは、白頭山10世紀噴火の噴火年代・噴火推移・噴出物分布等の最新の研究成果が報告され、10世紀噴火の概要が明らかになりつつあることが示された。文系研究者からは現地調査・文献調査の両面からの新発見が報告され、その一つとして主に文献調査から作成した10世紀噴火前後に（征服王朝によって）廃とされた白頭山周辺地域の群衆の分布をまとめた古地図が示された。この廃景の分布は前述の10世紀噴火の噴出物の分布範囲と概ね一致を示し、白頭山10世紀噴火による被災の状況をあらわしている可能性がある。この結果は、これまで史書中に（噴火の）記述がないため謎とされてきた白頭山の10世紀噴火が人類史へもたらした影響についてはじめてとらえた例といえる。これまでは個々に行われてきた感のあった文系・理系の各々の研究が、以上のように最終年度を前にして文理融合研究としての成果をあげつつあることが本シンポジウムでは示された。

今回は学外への広報がHPのみであったため、参加者の大部分が学内関係者となってしまった。しかし、所属は文学・理学・国際文化・農学・経済等と多分野にわたっており、総合討論を含めて文理融合研究の講演会としては大変有意義なものであった。

本共同研究の公開シンポジウムは毎年年度末に開催されてきたが、最終年度である平成15年度は、一般向けの普及講演として本年秋に第4回公開シンポジウムを開催する予定である。

(宮本 毅)

日本館便り

nihonkan-dayori

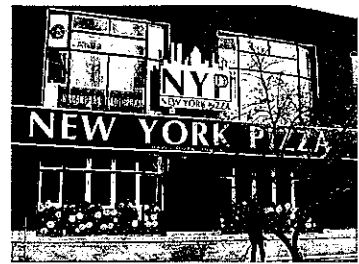
大学の学生の頃から頻りに海外旅行に出かけましたが、その度に外国における日本の大衆文化の底力を実感してきました。中でも最も強力な大衆文化は、①アニメ、②テレビゲーム、③トレンド・ドラマ、④歌謡曲の4つです。アニメとテレビゲームは全世界に輸出されています。例えば、昨年アルゼンチンを訪れましたが、スペイン語版の「ドラゴンボール」をテレビで放映していました。これまで各国のゲームセンターを訪れましたが、ほぼ70%は日本製品で占められています。ドラマと歌謡曲は主に香港、中国、台湾に限定して浸透しています。1993年に香港を訪れたときに、武田鉄也主演の「101回目のプロポーズ」を中国語版で放映していましたし、その主題歌は中国語で流れていました。ドラマと歌謡曲はアジア限定ではありませんが、ソフト・パワーを持っていると言えるでしょう。

ロシアの場合も、アニメとテレビゲームについては日本のソフトが圧倒的なシェアを占めています。「セーラムーン」や「ポケットモンスター」はロシアの子供たちをテレビに釘付けにしました。現在「幽遊白書」が米国でヒットしているのも、これ



村上春樹の「ダンス・ダンス・ダンス」と村上龍の「69」

間もなくロシアに来ると思います。今日本で人気のある「とっつこハム太郎」は今後世界で流行る可能性があります。最近、ノヴォシビルスクのファスト・フード店では、日本のゲーム機を置くようになりました。



日本のゲーム機を置いているニューヨーク・ピザ（ノヴォシビルスク）

それが日本語のまま置かれているので、中古製品が日本から流れてきているものと思われる。人気機種はタイマーとコナミの製品です。今後は日本と正式に交渉を行い、ロシア語版も製作されるのではないのでしょうか。

最近、ロシアで注目を集めているのは日本文学です。中でも村上春樹の作品は人気があり、ノヴォシビルスクの書店で彼の執筆した『ダンス、ダンス、ダンス』がベストセラーとなっています。また、先日モスクワで北野武監督の「dolls」が封切られましたが、新聞各紙に好評されていました。一方で、大衆文化とは異なるのですが、ダーチャ（別荘）の庭に和風の石庭を造園するのが流行となっています。また、現在ニューリッチ層の間ではアパートの部屋の模様替えが盛んに行われていますが、その際に和風の空間を設えるのがステータスになっています。最近のロシアに限って言えば、日本文化そのものが現在巨大なソフト産業になりつつあると言えます。これは日本人が意識的に文化輸出を行っているというよりも、日本人の知らない間に、自然に海外に浸透していると言えます。

(塩谷昌史)

● 最近の共同研究会から ●

- ◆ 2003年2月6日（木）11:00より、共同研究「現代韓国及び周辺同胞社会に見る伝統構造・社会動態と民族自我」第2回研究集会在、川内北キャンパス川北合同研究棟3階セミナー室において開かれ、次の報告が行われた。
 - ・ 權斗煥（ソウル大学校人文大國語國文學科教授、北海道大学客員教授）
「高麗における歌謡伝統の形成」
 - ◆ 2003年3月8日（土）13:00より、研究会「コミンテルンと東アジア」が、川内北キャンパス川北合同研究棟4階会議室において開かれ、次の報告が行われた。
 - ・ 水野直樹（京都大学人文科学研究所教授）
「コミンテルン初期大会と朝鮮代表について」
 - ・ 山内昭人（九州大学人文科学研究所教授）
「片山潜、日本共産党とコミンテルン」
 - ・ ユ・ヒョジョン（和光大学人間関係学部教授）
「韓人社会党とモスクワ-朴鎮淳の足取りや初期活動」
 - ・ 石川禎浩（京都大学人文科学研究所助教授）
「コミンテルンに参加した中国人共産主義者」
 - ・ 生駒雅則（大阪外国語大学非常勤講師）
「シュミヤツキーとモンゴル」
 - ・ 寺山恭輔（東北大学東北アジア研究センター助教授）
「ヴィレンスキー・シビリャコフとコミンテルンの東方政策」
- コメンテーター
- ・ 和田春樹（東北大学東北アジア研究センター客員教授、東京大学名誉教授）

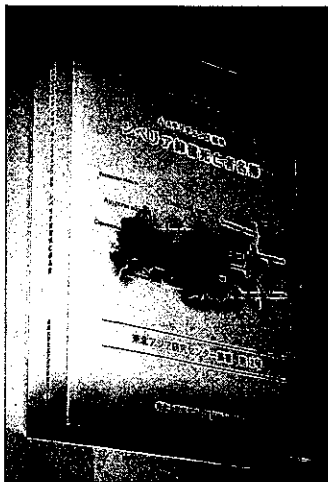
- ・ 富田 武（成蹊大学法学部長、教授）
- ◆ 2003年3月14日（金）13:00より、共同研究「図們江沿流居民生活誌の通時的共時的的研究」第3回研究集会在、川内北キャンパス川北合同研究棟4階会議室において開かれ、「中朝間国際河川研究」について、次の報告が行われた。
 - ・ 上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター助教授）
「図們江沿流開発計画立ち上げの経緯と吉林省」
 - ・ 広瀬貞三（新潟国際情報大学助教授）
「鴨緑江における水豊ダム建設
…「満州国」側を中心に…」
- ◆ 2003年3月18日（火）13:30より、共同研究「東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究」第4回研究集会在、川内北キャンパス川北合同研究棟セミナー室において開かれ、次の報告が行われた。
 - ・ 上野稔弘・成澤勝（東北アジア研究センター）
「ウズベキスタン高麗人にみるアイデンティティの現状」
 - ・ 鈴木岩弓（東北大学文学研究科）
「墓からみたポリトオージェルの人口動態」
 - ・ 柳田賢二（東北アジア研究センター）
「ポリトオージェル高麗人2世のロシア語・朝鮮語混在言語について」
 - ・ 菅野裕臣（神田外語大学）
「ウズベキスタン高麗人の高麗語について
—研究の現状と今後の展望—」
(鹿野秀一)

最近のセンター出版物より

A.A.キリチェンコ編集『シベリア抑留死亡者名簿』東北アジア研究叢書第12号 2003年

ロシアにおける「シベリア抑留者」研究の進展

第二次世界大戦末期のソ連の「満州」への侵攻と多数にのぼる「抑留」問題は、日ロ交流の歴史の中に横たわる大きな問題である。戦後約60年の歳月の中、1991年のソ連の崩壊という大転換もあって、日ロ関係は半歩的ではあるが前進してきた。しかし、日ロの相互理解は必ずしも進んでいない。「抑留」問題については、関係者が多いこともあって日本での関心は高い。しかしロシアでは長く情報は閉ざされていた。これに風穴を開けたのが、ロシア科学アカデミー・東洋学研究所のキリチェンコ上級研究員である。同氏はソ連時代から



シベリア抑留死亡者名簿

研究を開始し、日ロ相互理解協会会長として日本の「抑留者」団体と交流を進めてきた。同氏を客員教授として招聘した本センターでは、このたび同氏の長年の研究に基づいた死亡者データを、全777頁の大冊として刊行した。このことの意義は限りなく大きい。まず、ご遺族がこのロシア側のデータと照合することで、新たな知見が得られる可能性が生じた。そして、ロシアにおいても真摯に「抑留」問題の研究が進められていることを我国に

広く知らしめ、日ロの相互理解の進展にも大きく役立つと考えられる。さらに、これによって学問的な基礎が与えられ、日本・ロシア・モンゴル等の協力によって、「抑留」問題の全体像を学術的に把握する道が開けたのである。

(山田勝芳)

瀬川昌久編『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』東北アジア研究叢書第8号 2003年

本著は、平成11年度～13年度に行われた本センターの共同研究「文化のディスプレイと伝統の再編—東北アジア地域における民族観光産業・博物館等の文化的影響力についての研究」の成果である。

本著は、東・北アジア各地の事例をもとに、観光産業や博物館による文化のディスプレイと「民族文化」「伝統文化」の再編・再定義の過程の実態を、具体的かつ理論的に分析して行くことを目的としている。

扱われている題材としては、海外の博物館等所蔵のアイヌ文化コレクションとアイヌ民族研究の方法論の問題（小谷凱宣論文）、ロシア・アムール川流域先住民族の「伝統文化」展示と文化復興運動（佐々木史郎論文）、東シベリアのサハ共和国における文化復興運動（高倉浩樹論文）、中国の民族観光の概況（馬建ショウ論文）、中国リー族ミャオ族における民族観光と社会変化（瀬川昌久論文1）、中国ヤオ族における民族文化の創出（瀬川昌久論文2）、香港における観光イメージの形成戦略（岡野正純・王向華論文）。

なお、本著は本センターの叢書として刊行すると同時に、風響社より市販版を刊行した（瀬川昌久編『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』、東京：風響社、2003年3月刊、本体価格2,500円）。これは、本センターの研究業績を、一般読者に対してより広く公開するための試みである。

(瀬川昌久)

センター動向

■寄附研究部門

平成13年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）
- 魁叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

■現在の客員研究者

本年4月～6月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

- 王満特噴（ワン・マンドガ）教授：中国、中央民族大学教授、清代モンゴル文歴史文獻の文学的性格に関する研究
- BOERNER, Wolfgang-Martin（ボナー、ウォルフガング・マルチン）教授：アメリカ、イリノイ大学教授、ポーラメトリックSARによる東北アジア環境計測評価に関する研究
- VANCHIKOVA, Tsymjit Purbuevna（ワンチコワ、ツィムジト・プルブエヴナ）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究文献部門主任、モンゴル仏典の文献学的研究
- 金旭（キン・ギョク）教授：中国、吉林大学地球探索科学技術学院教授、長白山火山の地球物理学的研究

<客員研究員>

- 方 広有（ファン・グアンヨウ）研究員：中国、中国伝播伝搬研究所教授、高精度地中レーダの開発と人道的地雷検知への応用に関する研究
- AMARSAIKHAN（アマルサイハン）研究員：モンゴル、モンゴル科学アカデミー上級研究員、合成開口レーダと地中レーダの組み合わせによるモンゴル環境計測
- MORRIS, John Francis（モリス、ジョン・フランシス）研究員：オーストラリア、宮城学院女子大学国際文化学科学科教授、近世東北史に関する研究

(柳田賢二)

活動風景 強酸性湖潟沼の生態学的研究紹介

地域生態系研究分野では、ニューズレター15号で紹介した西シベリアのチャーニー湖沼群のほかに、日本・千島列島に広く分布する火山性の強酸性湖のひとつである潟沼（かたぬま）を研究対象のひとつとして継続的に調査をしています。潟沼は宮城県鳴子温泉の南東約1kmに位置し、周囲を胡桃ヶ岳や尾ヶ岳などのいくつかの溶岩丘に囲まれた火山湖です。記録によると837年の噴火によって出来た火口に水がたまって形成された、比較的新しい湖と見られています。周囲が約1500mほどで、最深部が約20mの楕円形の小さな湖です。

この湖の特徴として、斎藤茂吉が湖岸から白い火山性の煙が立ち上る様子を詠んだ歌碑が湖の北岸にあるように、今でも湖岸の一部や湖底の数カ所から、硫化水素を含む火山性ガスが出ています。



胡桃ヶ岳より潟沼を望む。夏期の成層状態が崩れ、硫化水素が酸化されイオウ粒子が浮遊して白濁している。

硫化水素が酸化されて硫酸になり、強い酸性（pH2付近）を示すことから、湖沼の研究者の間では世界的に知られた湖です。しかしながら強酸性の環境にもかかわらず、サンユスリカとよばれるユスリカ1種の幼虫が、底泥中に生息しているだけでなく、湖水中を遊泳している所が観察できます。このように肉眼で観察できる生物の他、底泥の表面に酸性に強いケイソウの1種が、また水中には湖面が濃緑色になるほど増えることもあるクラミドモナスと呼ばれるソウ類や酸性環境に特徴的なバクテリアなどが生息しています。

鳴子は仙台から車で1時間半ほどの近い距離にあるため、月に数回潟沼を訪れ、水質や生物の調査を継続しています。その結果、潟沼における湖水の成層状態やユスリカの数の変動、ユスリカのエサの推定、バクテリア群集の組成などが分かってきました。温帯にある湖で冬に氷被をもつ所は、春先に氷が溶けて垂直方向の水温が一様になった後、気温の上昇にともない表層が暖まり、暖かい表水層と冷たい深水層の成層状態が

発達してきます。しかし潟沼では火山による地熱が湖底より供給されているため、春から夏にかけての成層状態が弱く、急な気温の低下によって成層が崩れ、表水層と深水層が混ざってしまうことがあります。このような循環状態が起きると、それまで深水層に蓄積していた硫化水素が表面まで行きわたり、これが酸化されて湖水が全層で無酸素状態になり、酸化されたイオウの粒子で湖水が真っ白になる状態が数日続くことが、しばしば観察されています。このような現象が起きると、ここに生息するユスリカ幼虫にも大きな影響を与え、大部分のユスリカが死滅してしまいます。そのため、1年で5～6世代繁殖するこのユスリカの個体数変化は、このような現象の有無によって影響を受けていることが分かってきました。また、ユスリカとそのエサとなる可能性がある生物や有機物に含まれる炭素と窒素の安定同位対比 ($^{12}\text{C}:^{13}\text{C}$, $^{14}\text{N}:^{15}\text{N}$) を測定することによって、ユスリカは主に底泥表面で増殖したケイソウ



潟沼に生息するサンユスリカ（上）とケイソウ（下）

ウを食べていることも明らかになってきました。更に、湖水中のバクテリア群集を構成している種類組成を調べる方法のひとつとして、バクテリアのDNA中にある特定の遺伝子（リボソームRNA遺伝子）の配列を比較することによって、系統的な位置関係から種類を推定する方法があります。この方法により、潟沼ではイ

オウ酸化に関わる好酸性バクテリアが、湖水の成層状態に応じて変化していることも分かってきました。今後は、潟沼が極めて単純な生物組成からなっていることから、湖における無機環境と生物間の相互作用の全貌を明らかにしてゆき、一つの生態系としての理解を目指しています。

(鹿野秀一)

編集後記

本号では、多くの公開講演会やシンポジウムが開催されたため、その報告の記事に十分な紙面がなく、せっかく送って頂いた写真を使えない場合もあり、申し訳ありません。本号で私の編集担当が終わりになりますが、執筆者の皆様のご協力を感謝します。

(鹿野秀一)